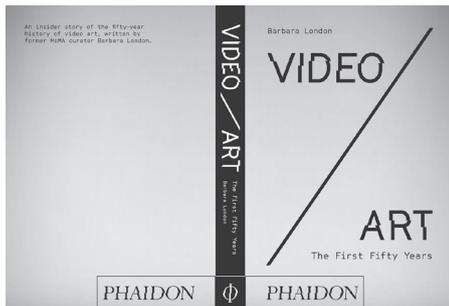


現在通信 From New York

富井玲子

バーバラ・ロンドン——一人称美術史の妙味



バーバラ・ロンドン著『ビデオ・アート』の表紙と裏表紙



バーバラ・ロンドン 近影

と言っても過言ではない。

それだけに、一人称の記述を随所に取り込んだ本書は、ビデオ・アートの黎明期を彷彿とさせて、回顧録としても面白く、美術史としての情報量が豊かで読み応えもあり、入門的概説書としての役割も担っている。

ロンドンと日本の関係もまたビデオがつかないでいる。ビデオカメラを作った国として興味を持ち、当時の金額で五千ドルの助成をアメリカ力松下電器から受けて78年に

来日、79年に「Video from Tokyo to Fuku and Kyoto」展を企画し、全米に巡回させた。

日本人作家では、久保田成子が76年に制作したビデオ彫刻《デュシャン・テナー階段を降りる裸婦》、また古橋第二のリリカルな94年のインスタレーション《Lovers》

をMOMAに収蔵したのもロンドンだった。

ロンドンが調査で集めた資料は同館のアーカイブやライブラリーに収蔵されている他、ロンドンが同館で企画した展覧会のデータはプレスリリースとともに、自らのホームページ(Barbaralondon.net)で公開している。

さて、去る1月20日に古巣のMOMAで開催された出版記念会に出席した。メディア・パフォーマンス部門の主任キュレーター、スチュアート・コマーとの対談の中で印象に残ったのは、大学院生に必ず教えているという言葉だ。常に一次資料にあたりなさい。人の書いたものを鵜呑みにしてはいけない。作家インタビューはいくつも読みなさい。映画の『羅生門』と同じで一つのエピソードにいくつもバージョンがあるから。現場で作家たちと交流しながら長く仕事を続けてきたキュレーターならではの教訓だろう。

友人のバーバラ・ロンドンがフアイドン社から『ビデオ・アート』なる著作を今年1月に出版した。副題は「最初の50年」。アンペック社の商業用ビデオレコーダーが登場したのが1956年。民生用の展開はやや遅れて、先駆者ナム・ジュン・パイクがソニー社のポータバックを使い始めた65年が、ビデオ・アート元年とされている。

ニューヨークに生まれ育ったロンドンは、早くからアートに親しみ、学部生時代にはダウンタウンの前衛芸術やカウンターカルチャー

を追求した。大学での専攻はイスラム美術だったが、修士課程を修了する70年にマース・カンニングムのダンスを見て時間芸術への関心が目覚めた、という。

同年、ニューヨーク近代美術館(MOMA)の国際部門に就職。版画部門に異動して当時はまだ注目されていなかったアーティスト・ブックを手掛けたのち、ビデオの形成の現場で仕事をしてきた、